歴史を歩く⑦

町文化財紹介コーナー

「神領古墳群」

▲神領 10 号墳で発見された武人埴輪

益丸から天子ヶ丘方面の台地を見ると、不自然に樹木に覆われた小さな丘が2つあり、その姿がイモ虫みたいだったので、小さいころ「イモ虫の森」と呼んでいた。

中学3年生のころ、この「イモ虫の森」が神領古墳群の10号墳と11号墳であることを知って驚いた。私が考古学に関心を持ち始めたのは、まさにこの時だったのかもしれない。

西神領・天子ヶ丘・文化通り・後迫集落が位置する舌状台地には弥生時代・古墳時代・平安～戦国時代と複数時期の遺跡が分布し、神領古墳群はこの遺跡群内に存在する。

神領遺跡群内には、古墳時代の高塚古墳（横瀬古墳のように土を盛り上げて造る墓）が1～13号まで発見されている。

昭和37年に6号墳の後円墳の一部が当時の土地所有者によって発掘され、日光鏡と獣帯鏡の2枚の鏡が採取された。日光鏡については、古墳時代より後世のものという指摘もあるが、いずれにせよ、どのような状態で出土したのかという記録がないのが悔やまれる。なお、6号墳は昭和43年に宅地造成計画に伴って発掘調査がなされた。残念ながらその調査結果は公表されていない。

今年8月中旬から9月上旬にかけて、鹿児島大学総合研究博物館の橋本達也助教授と学生らによって、10号墳の調査が行われた。

残っている古墳の全長は約34メートルであるが、もともとは全長60メートル級の規模であったことが分かった。横瀬古墳に代表される大型の古墳に次いで中型の古墳に位置づけられる。築造時期も横瀬古墳と同時期であることから、横瀬古墳に埋葬されていた人物に関連する地域の有力者と言える。

調査のなかで驚いたのは、形象埴輪が出土したことである。形象埴輪とは、人や動物、家などを表現した埴輪のことである。一般的に古墳には埴輪がつきものと思われがちであるが、県内の古墳のなかで確認されているのは、横瀬古墳だけであり、形象埴輪となると横瀬古墳に次いで2例目である。

なお、10号墳で出土したのは形象埴輪でも「武人埴輪」と呼ばれる冑をまとった兵士の形を表現した埴輪である。10号墳の武人埴輪は全国的に見ても、人物を表現した埴輪がつくられ始められたころの古い時期のものである。また、他に類を見ないほどのリアルな表情をしており、口の中は別に歯を装着できるような痕跡もある。不気味に微笑んだような表情は、古墳を霊的なものから防ぐためのものと言われている。

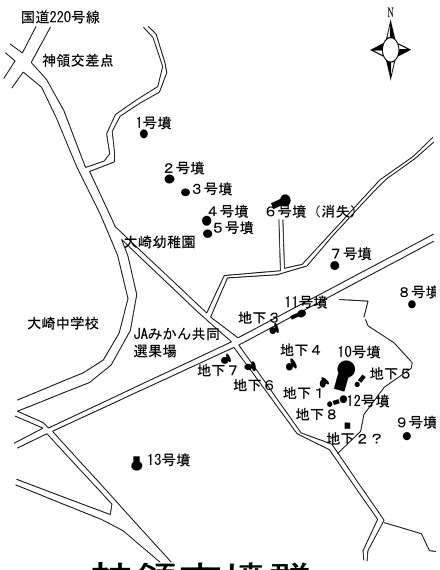
高塚墳や埴輪は近畿を中心とする古墳文化の要素であるが、これまでの古墳研究の成果では、古墳群の形成が著しい大隅地域でさえも、埴輪文化が十分に定着していなかったと思われていた。

今回の埴輪の出土によって、神領10号墳を構築した有力者もまた、横瀬古墳と同様に大和文化に強く影響を受けていたことを鮮明に裏付けるものである。

9月2日に神領10号墳の現地説明会があり、100名以上の方の参加があった。町内の方も多く見受けられた。

出土した埴輪を前に、関心深く説明に聞き入っている参加者の様子を見ていて、ふと、中学3年生のころの自分を思い出した。私の考古学人生の原点である「イモ虫の森」は、今年の夏、ようやく古墳としての存在を多くの人に知らしめたのである。

文・大崎町埋蔵文化財専門員（内村）



神領古墳群

※「地下●は地下式横穴墓の意